

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

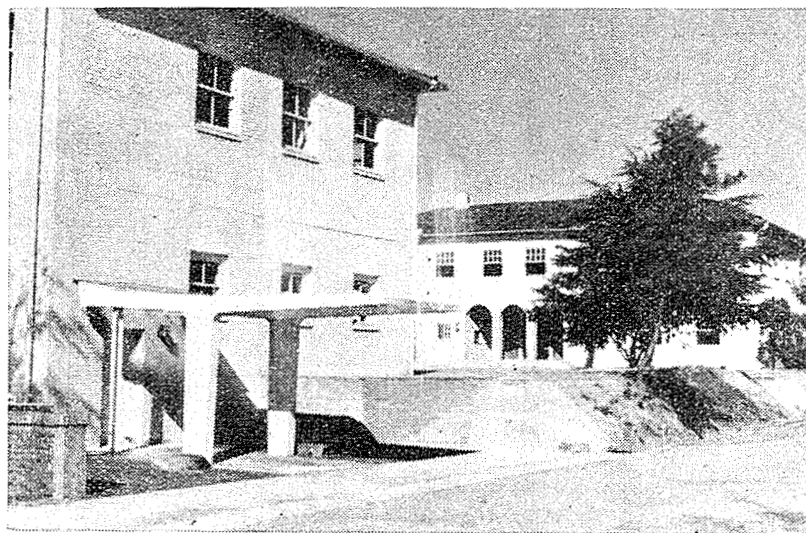
Osaka, November 15th, 1952. No. 253

關西大學學報

第 2 5 3 号

昭和 27 年 11 月

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
復刊第二三号（通卷第二五三号）
昭和二十七年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）



關西大學學報局

Beethoven a dit : Il faut que la Musique
fasse jaillir du feu de l'esprit —
Et Baudelaire ajoute : la Musique
creuse le ciel !

Que ces deux éloquentes sentences soient
de nature à éclairer, pour les jeunes
génération d'étudiants japonais, for-
més à l'Université du Kansai sous l'o-
cûle de Maîtres éminents, la signifi-
cation profonde de l'art-soufre occi-
dental, qui mieux qu'un plaisir
de l'oreille est une confidence de
l'âme !

Alfort

Osaka 1952

関西大学の学生諸君に

ベートーヴェンは次の様な言葉を遺した。

「音楽はエスプリの炎をはげしく迸さしめるもの
であらねばならぬ」と……

更にボードレーはこれに付け加えた。

「音楽は天を貫く！」

すぐれたる師の薫陶の下に関西大学で学ぶ日本の若
き世代の学生諸君の爲に、この二つの雄渾なる至言が
唯耳のみの悦ばしめる以上に心の祕をも語りうるも
のであるというこの西洋藝術の深遠なる意義をおのず
から明かならしめるものたらんことを。

一九五二年 大阪にて

アルフレッド・コルトー

讀史餘情

安藤俊雄

願れば四十年に近い昔、私の青春学徒の頃のこと。
一白面書生として京大史学科で故桑原隲蔵先生の講述に列していた頃、当時故先生は漢書西域傳の研究に精力を打ちこんでいられて、東大白鳥博士を向うにまわして大宛貴山城について学界に花々しい論戰を闘わされ壯觀を呈していた。秋の一日講義がこの問題の一端にふれるや、所説を續々として述べられ舌端火を発し口角に泡沫飛ぶのさま凄しく「吾輩は」と大声疾呼その情熱もゆる激越に居並ぶ学生は片津をのむで聞き入った。不肖な弟子の私は師の博引旁証の考証振りに唯啞然として難解に腦を疲らしただけで論旨の要点すらも掴めず、左耳から右耳へと通り抜けて仕舞い記憶にとまらなかつた。魯鈍な私の忘却から免れているのは、恩師が西域史話の余談としてはさまれた史傳が唯一つ、それは漢室の公主細君のローマンスとその悲歌である。漢書西域傳六六に記されているもの、西漢の歴代が防衛鎮撫に手をやいた北狄匈奴の勢力が、かの張騫の一生かけての西域經營の功によつて漸く抑制されるようになったとき、武帝がこの匈奴を側面から牽制させる勢力として西域烏孫国王を懷柔するに傾倒した。この際に細君のローマンスが起つた。細君は江都

王建の女とあるから名門の出でありながら、漢室の国策の犠牲となつて天子の命もだしがたく武帝元封六年の公主（皇女）としてはるる西域異国烏孫王に送り届けられて王の右夫人の待遇をうけた。ところが匈奴王も漢室の政略の向うを張つて烏孫王に女を送つたので、烏孫王はこれを左夫人として礼遇した。そこで漢公主細君は戎狄の国で自ら住居を治め独居して融和せず、久しくしてから烏孫王の孫兒に配した。細君の郷愁の情切なる歌が漢書にのせられているのを、故恩師が講述の間に板書朗々と説諭されたその風采と声韻とは、今に不肖の弟子の眼底耳奥にまざまざと印しつけられている。

吾家嫁三戎兮天一方 遠託異国兮烏孫王
穹廡為室兮穹廡為牀 以肉為食兮酪為漿
居常土思兮心内傷 願為黃鵠兮歸故郷
戎の住む異郷に閉居して郷愁哀傷の情を遙に故国に送る和親公主の心根は、師の朗声を通じて、青年弟子に聞々として迫るものがあつた。明朝の陳鳴鶴の作に烏孫公主歌が二首ある。

生三長深宮一來出レ門 九千里外嫁烏孫一
一声胡角空回首 何処天辺是故国

第二五三号 目次

卷頭言

読史余情……………安藤 俊雄 (1)

学内報…………… (5)

定例評議員会—学部長更迭—人事異動—
学会出張—計報—故八鳥教授子女育英資
金募集

校友…………… (7)

関大修士会—十四会—昭八会大阪支部—
雜報

淨瑠璃秋夜話……………金子又兵衛 (9)

学 生…………… (11)

加茂彌生式遺跡の調査……………末永 雅雄 (10)

バリー短信…………… (13)

編集後記

同

赤谷城中雨不レ休 雁声日暮使二人愁一
漢家今夜平陽第 宮女如花倚二玉樓一

西漢末、匈奴が南北に分裂衰へ始める頃になつて漢室の対匈奴策にあらわれた和親公主として王昭君のローマンスが有名である。昭君は良家の子女で美容を以て帝室の後宮に入つたが、後宮に擁する美女の數夥しいので元帝は逐一これを知ることができない。そこで宮廷内にお抱えの美人画家王延壽に後宮美人一人一人の肖像画を描かせ天覽に供することになつた。そこで後宮の女達は成るだけ美貌に画いてもらわうと競うて王画家に贈物をしたが、ひとり自信のある昭君だけは贈物をしなかつた。やがて南匈奴王が漢に朝貢し和親を乞うて自ら姫婦と名乗り漢の公主を迎えようと請うてきた。そこで元帝は後宮の美人肖像画數多のうちから候補を選んで昭君に白羽の矢をたてた。昭君は悲嘆の涙にくれたが帝の命に服していよいよ出発に際してお別れを言上するために元帝に拜謁した。ここに初めて元帝は昭君を実見してその美容を惜み茫然自失したが、時既におそし、約に従つて昭君は匈奴に降嫁した。昭君去つた後帝は燃える春戀の情から憤怒やる方なく、画師の王氏を殺戮したが尙納得できなかったという。このローマンスも後世詩客の好題となつてゐる。

王 昭 君 李 白
昭君執三玉鞍一 上レ馬啼二紅粧一 今日漢宮人
明朝胡地妾 同 白樂天

漢使却廻レ恩寄レ語 黃金何日贖二蛾眉一 君王若問二妾顔色一 莫レ道不レ如二宮裡時一

王昭君怨詩 古詩賞析 卷三

秋木萎華、其葉萎黃、
有レ鳥飛レ山、集於苞桑、
養育毛羽、形容生レ光、
既得レ升レ雲、上遊二曲房、
離宮絕曠、身体摧藏、
志念抑沈、不レ得二顔頭一、
雖レ得レ委食、心有徊徨一、
我獨伊何、來往憂レ常、
翩翩之燕、遠集二西羌、
高山義興、河水泱泱、
父兮母兮、道悠悠長、
嗚呼哀哉、憂心惻傷、

明 妃 曲 歐陽永叔

漢宮有佳人 天子初未談
一朝隨漢使 遠嫁單于國
絕食天下無 一失難再得
雖能殺二画工一 於事竟何益
耳目所レ及尙如此 万里安能制二夷狄一
漢計誠已拙 女色難二自誇一
明妃去時淚 酒向枝上花
狂風日暮起 飄泊落二誰家一
紅顏勝レ人多二薄明一 莫レ怨二春風一當二自嗟一

中国の宮廷に咲く名花一輪、和親公主と因果をふくめられて塞外胡風の荒狂う曠野に移し植えられ、慣れぬ衣食住に郷愁やる方なく飛鳥行雲に托して心を故山に通わた可憐なローマンスが中国詩人によつて空想

豊かに取扱われてきたことを知る。

西歐中世史上にも漢代中国の和親公主とよく似たローマンスが探し求められるのである。西暦十世紀のビザンツ帝国（ギリシャ帝国又は東ローマ帝国とも呼ぶ）においてこのようなことを見出せる。ビザンツはその国家の構成その社会組織、その経済力、その文化的性格において東亜中国に比類するものが多く、両者その中間に回教文明を挟んで、中世期世界最高峰をゆく高次元の文明を持していて、其の周辺に低い文化水準の蠻夷との交渉に悩んだことも東西帝国類似の環境をもつていたからである。それで和親公主類似のローマンスが西方に見出されるも自然であろう。但しその歴史的意味如何といえは、漢の和親公主は一場の果ないローマンスにとどまつて、あたかも可憐な人身御供も何ら文化史的影響を留めずに終つたが、西方ビザンツのそれは唯しめやかな温みをもつたローマンチックの匂い床しい史話だけでなく、後代文化発展に大きな痕跡をのこしている。かような差異は東西ローマンス主人公の性格から出たものでもあらうけれど、一つには東西両世界において婦人の社会的評価の高低の差によるのではなからうか。

西暦十世紀のビザンツ帝国は東方サラセンの高い文明と対抗しつゝその背面では北流黒海の北岸からドーナウ流域まで、今日南ロシアとバルカンの一帯にかけて早くからアジア系スラヴ系の雑多な民族が去来して侵入し、六世紀にはアジア系のマジヤール、アヴァール族が蟠居し、次いで九世紀十世紀にはその背後地から今のバルカン・スラヴ諸族が南下してドーナウ

河を越えて都のコンスタンチノールを脅かし、黒海岸に在るカーザル族の背後からロシア諸族が押し出てきてクリミアの南端ビザンツ人の商業都市ケルソン（後のセヴストポリ）に迫つた。これら蠻民の向ふ側西欧には既にフランク帝国の威力が、ローマ法王と結んで神聖ローマという新秩序をたて封建社会と土地経済組織で一応の安定統一が出来ていたものの、その文化水準は低くてビザンツ文明と比ぶべくもない。九世紀フランク宮廷を訪れたバクダード回教君主の使節やビザンツ商人のもたらした東方文明の生産品、棉布、香料、宝石、水時計その他工芸品が西人の驚嘆好奇憧憬的であつたこと當時宮廷傳記者の記している通りであつた。後十三世紀第四十字軍の西欧武士達でもビザンツの都の花やかさ、都人の豊かに優雅な生活振りを目撃したとき驚異の感動に茫然自失したとの実録を記しているのでも、ビザンツの燦然とした文化生活、豊裕な財力、高尚な知識生活は前に述べた辺土の蠻夷に格段の差をみせていた。このようなビザンツの宮廷が北のスラヴ諸族の君主や西方ドイツ王侯達の脅威を避けそれらを懐柔して侵略の鋭鋒を和らげ、或は遠交近攻の策をたてるために通婚策をとるに至つた。かような国策に利用された異国君主への降嫁の著しい例としてサクソン家ドイツ皇帝オット二世に婚嫁したテオファノとロシアのスヴィアトスラヴ族君主のヴラディミールに降嫁したアンナと、ビザンツ皇女姉妹を挙げてよろしく思う。

さてこのビザンツと蠻公主が現われた西暦第十世紀といへば、文化史上ビザンツのルネイサンスと讃えら

れる程、ビザンツ文運の隆盛期に相当する。この世紀の前半期は文人の譽れ高い皇帝コンスタンチン七世（九一三—九五九）が半世紀に近い文治の功績をあげ、彼の好學と奨励によつて古典ギリシャ文化財典籍の蒐集研究が後世に遺したところ大きく、国富み民豊かに国力充実整備した。この後を承けたロマーノス二世（九五九—九六三）は在位僅かで死んだが、次の孫の世紀には皇帝バシレイオス二世（九六三—一〇二五）とその弟とが共同君主として立つた。問題の公主姉妹は、これら君主の同胞である。従つて姉テオファノと妹アンナとは身分の貴さは勿論彼女達の品位と教養との高さは周知のことであつた。このような高貴の才媛を配しようとの相手は如何に。テオファノの嫁しゆくドイツではサクソン公家がドイツ諸侯の指導力を把握してローマ法王廷と結びフランク以来の傳統を承けて神聖ローマ帝冠をとつて西欧の統一勢力となつていた。この勢力を馴撫して藥籠中のものとするを得たならば、ビザンツの声望を西欧世界に徹底させる政策に成功するのである。一方妹アンナの赴く地域の形勢如何に。黒海の北岸、今日ウクライナ、ドンバスの地方ではその昔ロシア公國をなしたスラヴ諸族のうち、スヴィアトスラヴ族が中心勢力であつてその君主ヴラディミールを手なづけることはスラヴ蠻民の圧迫を緩和策として最必要であつた。かような政策から割り出されて和蠻公主に姉妹皇女が異域に送られたのである。テオファノはゲルマニアの森の彼方へ、アンナは南ロシアの都キエフへ。

このような国策の使命を担うて公主達は雄々しくも

開明の故國を去り粗野な教化の低い夷國の君主に嫁した。しかし彼女達は感傷的なローマンスの主人公に終始することなく、男まじりの政治才能を示して蠻夷を啓蒙教化し彼等に秩序を教え新民族の指導者となり、或は氣高い賢母として生みの兒を教養ある君主に育て上げた。姉テオファノは九七二年ドイツ帝オット二世に嫁したが早く夫に死別し遺児幼帝オット三世の攝政となつて國務を執り、亡夫の志を繼いで神聖ローマ帝國の内外における難局に処し、家庭では幼帝の教育黨陶に自ら當つた。北独ハルツ山中のクエドリッブルグ城に在つて國內叛服常ないドイツ諸侯をよく畏服させ外はフランス、イタリアの諸豪と法王廷との間に企られた謀略を未然に抑え、エルベ河東境の蠻族ウエーデン—スラヴ諸族の侵入を制圧した。勿論彼女のドイツ經營には故國ビザンツ宮廷の背景に支持なくては考え難いけれども、その半面にビザンツ出身たる故に彼女に対するドイツ人の懐く不信、即ちビザンツ宮廷との因縁情実の禍を恐れる疑惑は免れない。彼女と血を分つ同胞兄弟が共同支配者としてビザンツの帝位に並びたちて強大な勢力を振つていたからドイツ人の恐れは自然であつた。彼等とはかく攝政テオファノの齒口をきき、ドイツの利益よりもビザンツに傾くとの悪評すら洩らした。しかしテオファノは常に公正な態度を持して第二の故郷に対する義理を重じて故國の同胞君主に誤られてドイツの利益を犠牲にすることはなかつた。メルゼブルグの僧正ティトマル師の遺した手記によれば、「公主の人となり、女性のつましさのうちに確乎たる性格をもち、ギリシヤ（ビザン

ツ)人に稀れな品行方正であつて、男まさりの強さを以て幼帝とその国を護り、よく傲慢を抑え謙讓を登用した」と稱讃を惜しまなかつた。しかし一方幼帝の教育においてはビザンツ学芸をドイツ慣習に優先させ、宮廷や社交にビザンツ風を導き入れ、ビザンツ古典教養を採取した。彼女自らギリシヤ古典教養を子に教えた外に、幼帝の師傳として迎えたランス大僧正ゲルベルス(後に法王ジルヴェステル二世)が曾てイスパニア回教の都コルドヴァル留学して回教學徒を通じてギリシヤ古典を学んだ経歴からみても、母后テオファノが幼帝の教養に対する期待のほどを推すことができる。つまり粗野なドイツ人の間にいてこの公主が故国の文化教養についての矜持は終生彼女の胸底を去らなかつたのである。

次にロシアに降嫁した皇妹アンナに移る。この公主の活動は姉のように分明に傳わらない。彼女降嫁した九八九年頃のロシア諸族の状態はドイツよりも遙かに開明の度低く、クリミア半島南端のビザンツ人の町ケルソンを通じてビザンツの生産品を輸入しその文物を徐々に傳習し始めていた。アンナ公主を迎えたのを機としてビザンツ風尚の流入は一段と促進されたと察せられる。ロシア人の国家社会宗教芸術文教に特殊な性格を與えた上にビザンツ—ギリシヤ要素がスラーヴ族に攝取される緒が、このようなビザンツ公主の降嫁によつて啓開されたことを思えば、西方における和親公主が漢代中国の淡いローマンスのそれよりも遙かに大きな文化史の意味をもつと断定して憚らない。(九月十九日稿)

—文学部教授—

故 關西大学文学部長評議員八鳥治一君 子女育英資金募集

八鳥治一君は明治三十六年三重県に生れ、郷里の商業学校卒業後、関西大学文学部英文学科に入學、その後英語學の泰斗故細江逸記博士の下に斯學の研鑽に努力せられ、昭和六年三月英文学科第一回卒業生として、卒業後も引続き大学院に於て英語學を専攻、昭和八年四月関西大学講師となり、主として大學予科に於て英語教授を担当、昭和十一年四月助教、同十四年四月教授に昇任、それ以前より既に同學生主事として、當時の予科長故村上喜貞教授の下に、學生の指導訓育の爲に献身的努力を重ねられ、終戦後の學制改革と共に教授として関西大学文学部英文学科の英語學の講座を担当、昭和二十六年十月には衆望を担つて文学部長となり、或は関西大学監事としてその發展向上の爲に寢食を忘れ、また同時に英語學界の振作推進の爲に、「アングリカ」及び「英學」の二誌を刊行、斯界の先輩師友の援助の下に絶大なる犠牲的努力と熱情を傾倒せられたのでありましたが、多年に亘る緊張と多方面の活躍とは、遂に君の健康を弱かに害しつゝあつたと見え、外面的にはさうは見うけられなかつたに拘らず、一度急患を得ては俄かに病草り、去る昭和二十七年九月一日夜半夫人の手厚き介抱の甲斐もなく、又親しき知友が枕頭に待する暇もなく溘焉として逝去られたのであります。

然るに君は生前ひたすら自己の専門とする英語學の研究の爲、また母校関西大学の向上發展の爲、あ

らゆる精神的肉体的犠牲を払はれ、又學生の愛護と訓育の爲にそのあらゆる純情を傾けられた爲に、君一家の私事に意を用ゐること少く、俄にその支柱を失はれた御遺族の悲嘆と心痛に對しては私共一同同情禁ずる能はざる次第であります。同君の子女は大阪梅花短期大学二年に在學中の長女を初め、二男二女あり、何れもそれぞれ高校中學或は小学校に在學中にて、その教育と一家の生計を維持する責任は、挙げて未亡人の一身にかゝる次第にて、私共の深く同情いたす次第であります。こゝに私共有志相計り同君子女育英資金を左記により募集致し、聊か同君生前の功勞に報いその靈を慰めたいと存じます。各位の御同情を賜はらば幸であります。

昭和二十七年十一月一日

發起 人 一 同

鐺方 貞亮	今井 憲夫	植野 郁太
上道 直夫	榎本金次郎	大小島貞二
金子又兵衛	佐伯 三郎	進藤浩二郎
高木 秀玄	羽生 忠	広瀬 捨三
矢口孝次郎	吉川 敬一	和田 豊二

(以上実行委員)

一、金額 一口金貳百円(一口以上)

一、御払込先 大阪市大淀区長柄中通二丁目

関西大学内

故八鳥治一君子女育英資金募集事務所

一、御払込期日 昭和二十七年十二月二十五日

學 內 報

定例評議員会

新評議員八四氏決る

去る九月二十五日締切られた評議員選舉投票の結果が判明、推薦及び職務による評議員と合せ、別表の新議員全員八四名が決定した。内訳は次の通り。

校友選出五〇名、学識経験者一五名、教職員選出一五名、学長、短大部長、一高校長及び幼稚園長各一名、計八四名

定例評議員会開催

議長に中務氏選出

定例評議員会は十月二十三日午後二時より天六学舎に於て開催、評議員会議長副議長及び役員を選挙し、なお大学現況報告あり、午後八時散会した。尙十一月十日現在就任を承諾された方は次の通りである。

議長 中務 平吉氏
副議長 榎本 信雄氏
理事 春原源太郎氏(重任)
木村 健助氏(新任)
宮島 綱男氏(重任)
久井 忠雄氏(新任)
森川 太郎氏(新任)
西尾専太郎氏(新任)
西村治三郎氏(新任)

監事

矢野 文雄氏(新任)
(各項イロハ順)

學部長定期異動

任期満了による學部長更迭は、新たに法学部長に木村健助教授、商學部長に今西庄次郎教授、文學部長には故八島教授の後任として上道直夫教授が補せられ、經濟學部長は鐙方貞亮教授の留補と夫々決定した。

尙各學部長代理は池垣定太郎教授(法)廣瀬捨三教授(文)、高木秀玄教授(經)及び河野稔教授(商)が補せられた。

人事移動

教授 木村 健助
本大學法學部長に補する
教授 上道 直夫
本大學文學部長に補する
教授 鐙 方 貞 亮
本大學經濟學部長に補する
教授 今西 庄 次郎
本大學商學部長に補する
教授 池 垣 定 太 郎
本大學法學部長代理に補する
教授 廣 瀬 捨 三
本大學文學部長代理に補する
教授 高 木 秀 玄
本大學經濟學部長代理に補する
教授 河 野 稔
本大學商學部長代理に補する

右昭和二十七年十月一日附(各通)

高 本 昇
有 田 稔

本大學助手に任し經濟學部勤務を命ずる

右昭和二十七年十月十六日附(各通)

高 堂 俊 彌

本大學助手に任し商學部勤務を命ずる
右昭和二十七年十一月十三日附

學 会 出 張

△岡野留次郎學長は十月十日より十三日まで文部省で開催の大學設置審議會第二十八回總會に出席

△吉永登教授は十月十日より十三日まで東京読売會館、東京大學で開催の万葉講習会及び國語學會に出席

△横田健一教授は十月十日より十四日まで信州大學で開催の日本人類學會、日本民族學協會連合大會に出席

△田中照教授は十月十一日京都工業纖維大學で開催の関西倫理學會に出席

△宇田米夫教授は十月十七日より二十一日まで金沢大學で開催の日本地理學會秋季大學に出席

△飯田正一・吉永登兩教授は十月十八日京都大學吉田分校で開催の一般教育第六回協議會に出席

△堀正人・矢口孝次郎教授は十月二十三日より二十五日まで東京上野公園日本

學術振興會で開催の人文科學總會に出席

△堀江藤晶一高教諭は十月二十四日より二十七日まで香川県高松市公會堂及び高松高校で開催の全國理化學教員大會第二十三回日本理化學協會總會に出席

△加藤由次郎教授は十月二十五日より二十六日まで関西學院大學で開催の関西哲學々會秋季大會に出席

△河村宜介教授は十月二十七日より二十九日まで明治大學で開催の日本交通學會に出席

△森川太郎・安田信一兩教授は十月三十日、三十一日の兩日名古屋東海銀行で開催の金融學會に出席

△河野稔教授は十一月一日神戸大學で開催の社會政策學會に出席

△富山忠三教授は十一月一日、二日の兩日青山學院で開催の日本商業英語學會に出席

△附屬圖書館司書主任大山綱憲氏は十一月五日より八日まで早稲田大學で開催の私立大學圖書館協議會全國大會に出席

△飯田正一教授は十月三十一日より十一月四日まで金沢兼六公園成興會で開催の俳文學會年次總會に出席

△川上敬逸教授は十一月三、四日、兩日同志社大學で開催の國際法學會に出席

本學に於いて十一月一、二兩日開催された公法學會に出席

岡田清作殿(本学評議員、日産電線社長、大正十一年専門部法科卒)去る十月二十五日、東京で急逝されました。謹んで哀悼の意を表します。

尙葬儀は同月二十九日阿倍野新斎場で行われました。

故八鳥教授子育英資金募集

去る九月一日、五十年の生涯を傾け母校関西大学の充実発展に絶大な努力を盡された故八鳥教授の急逝は、本学及びその関係者から痛く惜まれているが、優れた学者であり、教育者であつた故教授を失つた学園は、誠に秋風落葉、「亡くてぞ人は戀しかりける」の古歌の心のまゝ、銀杏黄葉の舞う校庭に故人を偲ぶ思いは、愈々深まり、故人の徳に酬いるべく御遺族の生活を聊かでも安らかにすべきだといふ学園内外の声に應えて、全教授、評議員、教育後援会、昭六会、その他関係校友を發起人として、廣く故教授の子育英資金募集に乗り出す事になつた。趣意書並びに応募方法は別掲の通りである。尙發起人一同は、出来るだけ多くの方々の協力を望んでいる。

表紙寫眞 千里山法文学舎本館前より

大学院を望む

昭和二十七年十一月十八日午前十一時頃(快晴)キヤノンⅢA型F1.8サクラネオパン、黄色フィルター、絞F16、百分の一秒、D76、ベロナB3。

評議員名表

(敬称略、イロハ順)

飯國壯三郎	岩崎公一	岩本好次	井上龍男	井西康雄	今井次郎	今西庄次郎	池田信之助	春原太一郎	原田鹿太郎	林田信太郎	丹羽英夫	西尾三郎	西村治三郎	西山四郎	西本寛一郎	戸根泰雄	織田佐治	大石雄一	大月真二	大島吉二	大島武雄	岡田清作	岡田留次郎	和田豊三郎	脇野徳三郎
-------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------

桂宅忠恵	神屋敷民蔵	神本信雄	榎川喜一	寒川壯七	四井雄	吉田三郎	吉田善一	高垣正次	高田蔵之助	武田喜代治	竹澤菊次郎	根津正平	内藤敬吉	中谷平治	中村敏正	中村金吾	中村源治	長柄静明	浪江祐治	村尾正治	宇佐美正	矢野文雄	矢口家次郎	保井孝剛	山崎敬義
------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

前川太良右衛門	松葉三郎	松原藤由	松尾高一	松村陸鴻	政井繁武	福田繁三	藤野春三	近藤政士	江里口春志	阿部甚吉	明石三郎	澤村榮治	木原繁實	木村宰三	木谷健一	水谷揆一	宮島綱男	白川朋吉	下條小野右衛門	下井三郎	平井忠雄	久井鹿治	久松紹治	森川寛	森川太	關川馬郎	角田好太	鈴木祥蔵	岡田親徳
---------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	---------	------	------	------	------	-----	-----	------	------	------	------

長

小林絹治氏（自、兵庫二区）大二専法

卒、兵庫県出身、元中央

新聞主筆、満鉄参事、農

林参事官、現太平洋産業社

長

高見三郎氏（自、静岡二区）昭四専法

卒、山口県出身、元警視

庁警視奈良、静岡各県経

済部長、前県副知事

田中 久雄氏（改、三重三区）昭三専

商卒、三重県出身、元武

藤山治祕書、鐘紡明石工

場長、現東海航空社長

法務次官に押谷氏

校友衆議院議員押谷富三氏は十一月十日を以て法務政務次官に任ぜられた。

松尾氏に緑授褒章

校友松尾高一氏（昭二専経卒、本学評議員）に対し、庶民金融事業に盡した功勞で、去る十一月三日緑授褒章が授與された。

同氏について本誌第二三七号の校友の面影の欄で紹介したことがあるが現在尙尼崎信用金庫理事長として活躍を続けられている。

故仁保先生の墓に詣る

去る七月十日、三重県久居町に新たに部隊が設置されることとなり、初代部隊長として着任したが三重県は私に取つては従来特別縁故のない全く初めての土地ですが、只一つ母校関西大学の学長仁保龜松先生の御出生地が当県であり今は故人となられた先生の墓が三重県にある筈である。この三重県に赴任して来た以上は一度是非墓に参らねばならぬと言う觀念が着任以来私の心の奥底に強く根をおろして居りました。恰も十月十五日老人の日を迎へその情禁ずるあたわずその翌日十六日午後ジープを走らせて西拓植村新堂の先生のお宅を訪れ墓前に礼拝し写真帳に綴らるゝ在りし日の先生の面影を偲び、御遺族と共に先生の御高徳を讃えながら一時を過し、夕陽迫る伊賀道街を帰營の途永い心の負債を完済したすがすがしい思いで秋の夜の空は一人と澄み切つてゐる様に感ぜられた。

先生の御位牌を拜してその戒名に静観院殿通譽關西龜松居士と関の字あるを見又写真帳に残る面影にも関西大学関係のものを最も多く拜見し先生が如何に母校関西大学の経営、指導に精魂をかたむけられてゐたかと云うことがうかゞはれ事の外の懐しみと尊さに感銘した次第で

す。姫御いちお様（先生はお子様がなく姫御が家を継がれている）が如何にも鄭重に先生の靈をまつられている有様に御遺族の心の床しさに打たれる共に先生の御徳を更にたかむるものを感じました。



評議員選挙ついで役員選挙もあり校友各位の学校に対する関心も一段と強まつている此の秋選挙し、選挙される人々の中にも先生が学長として本学に居られた頃の人々が多いと思ひますのでこれらの人々と共に先生の徳を偲びたく一文を学報に寄せた次第です。

三重県久居保安隊長
千 原 清 治記

—写真に仁保先生宅にて 筆者といちお様—

（二頁より）
團、二千学友の学歌合唱に迎えられたナインの瞳に喜びの涙が光る、榮の優勝旗、杯、盾と輝やかしい優勝に贈られる数々の賞品の中に、最優秀選手として、個人賞杯を贈られた田畑の戦績こそ、真に輝やかしいものであつた

◎米式蹴球部 部員の充実と合宿の成果を問う、今シーズン戦であるが、まだまだ若さが眼立つ試合成績で、第一戦、対同大戦も前半13対12とリードしながら後半二つのハンブルがたゝつて、0対12と一方的に得点を許し敗れた。

十月十二日 本学13—24同大 西宮
十月廿六日 〃0—39警視庁 馬場町
特にHB福地、久保田、FB草葉の活躍は印象に残つた

◎陸球部 十月二十五日より秋季リーグが開始されたが、本シーズンより各校フランチヤイズ制となり、本学は西宮を本拠地として各校と一戦づゝを行うことになつてゐる。

十月二十五日本学61(3031)52 同大
十月二十六日 〃51(2823)45 〃

試合前半の粗雑な攻撃が、後半の戦いを苦しいものにしてゐるが、今後、前半を慎重に攻めないと、どんな苦杯をなめるか解らない、殊にポスト下のフオロの粗雑さが改められなければならないと思う、優勝が期待されるだけに部員の健闘を望みたい。

淨瑠璃秋夜話

金子又兵衛

秋雨がしとしと降つてゐる。庭の萩や芙蓉や秋海棠がしつとり濡れてゐるのを見ると、急に淨瑠璃が聴き度くなつた。呂昇の「三勝半七」のレコードを出して掛けてみる。

「あとには園が憂き思ひ。斯かれとしも鳥羽玉の、世の味気なさ身一つに、結ばれ解けぬ片絲の、繰り返したる独り言。今頃は半七つあん。何処にどうして御座らうぞ。今更返らぬ事ながら、わしと云ふ者ないならば、舅御さんもお通に免じ、子まで生したる三勝殿を、夙くにも呼び入れさしやんしたら、半七つあんの身持も直り、御勘当もあるまいに。思へば思へば此の園が、去年の秋の思ひに、いつそ死んで了ふたら、斯うした難儀は出来まいものを……お氣に入らぬと知りながら、未練な妾の輪廻ゆゑ、添ひ臥しは叶はずとも、お側に居度いと辛棒して、是まで居たのがお身の仇。今の思ひに較ぶれば、一年前に此の園が、死ぬる心がつかなんだ。こらへて給へ半七つあん。妾この様に思ふて居ると、怨みつらみは露程も、夫を思ふ真実心。尙い

や増さる憂き思ひ。」

このクドキを聴いてみると、三十年程前の呂昇の、艶のある、張りのある、豊かな語り振りが思ひ出されて、マンネリズムだ、ヒューダリズムだと、若い人は笑ふかも知れぬが、つい私はホロリとするのである。お園の純情に、昔の人は皆泣かされたのである。お園は半七の許嫁で、半七の実家へ引き取られて、はや三年にもなるのに、半七は美濃屋の三勝に戀をして、お通といふ子まで産ませ、お園と結婚しないので、親の半兵衛から勘当されてゐる。半七は何故かお園に愛情を感じずに、女舞の三勝に心を惹かれたのである。お園に三年も空園を守らせ、しかも其のお園が婦らぬ夫を待ちながら、舅半兵衛に孝養を盡し、半七や三勝やお通に対して、少しも怨み心を懷かないで、却つて自分が死んで了ひ度いと思ふ位、底抜けのお人好しになつて居るだけ、お園には同情しても、半七の冷酷さは皆が憎むのである。その世間の憎しみに、親の怒りも、一切の障礙を排し、たと一途に三勝を愛しいと思ふ半七の純情

といふものも、これは貴く美しいものである。義理も人情も何も彼も否定してつて、真実の愛のみを肯定した半七の真剣さには、大いに近代性がある。

此の淨瑠璃「艶妾女舞衣」は、安永元年（約一八〇年前）の上場で、作者は竹本三郎兵衛等の合作であるが、彼等が近代的な戀愛觀を持つて居て、それで半七をあの様に振舞はせたなどと、可笑しな物言ひをするのではさらさらない。只、物は見様、考へ様によつて、どんなにでも見え、又は考へられると言ふ事を云つたまでである。女の男に対する純情（お園の場合）を取り上げるならば、男の女に対する純情（半七）も亦取り上げねばならぬと言ふのである。

この筆法で行くと、近松の世話淨瑠璃、「心中天網島」の女房おさんの純情に、同情の泪を注ぐのならば、小春と治兵衛、殊に治兵衛の小春に対する愛情の純粹性にも、同情してやるべきである。「一昨年の十月、中の亥の子に、火燭開けた祝儀とて、まあ爰で、枕並べて此方、女房の懷中には、鬼が住むか蛇が住むか、二年といふ物巢守にして」と、おさんに嘆かせるだけ、それだけ治兵衛の小春に対する愛情は純粹であつたのである。高が知れた湯女上りの一遊女の為に、世間の倫理に逆き、家庭を破壊し、財産を蕩盡した治兵衛、いや、命までも

捧げて、淀川沿ひの網島の、岸に置く霜と消えた治兵衛は、阿呆の天井であり、物笑ひの種であると、云へば云はれやう。しかし治兵衛の真実心、治兵衛の一途心の前には、一切のものは無力であつたのである。男心と秋の空と云ひ、「源氏物語」では繋がぬ船に譬へられて居る男の愛情の二重性、不純性と云ふものに對する、これは一つの例外と云ふべきである。

待てど暮らせど来ぬ女を信じて、橋の下で待ちくたびれた尾生と云ふ男は、にわか出水に押流されて死んだと云ふが、これも馬鹿だ、非常識だと一概に笑へないのである。その支那人らしい、大陸的な、茫洋としたところ、その女に対する愛情の深さと、信義の厚さは、大いに買つてやるべきである。

可憐な許嫁のミカエラを顧みないで、美しい淫らなジプシー娘カルメンの色香に迷ひ、或は當倉へぶち込まれ、或は密貿易者の群に投じ、或は闘牛士と渡り合ひ、終に不貞のカルメンを殺して了つたドン・ホセの愛情も、純粹で、無垢で、ひたむきであつた。

秀才の譽高き青年学徒、シユヴァリエ・デ・グリウが、美しくて才氣に富み、放逸で、不実で、しかも優しくて恐ろしい女、マノン・レスコオの妖姿に魅せられ、約束せられた將來の名譽も捨て、地

（次頁下段へ）

加茂彌生式遺跡の調査

末 永 雅 雄

加茂の遺跡は兵庫縣川辺郡川西町にある。三十数年前から彌生式土器、石器などを拾うことがあり、土地の宮川石器館は永年に亘る採集によつて、膨大な資料をもつていて考古学界では有名である。

いまより十四五年以前、宮川雄逸氏の招きにより浜田青陵先生に従つて、石器館の資料を見、また先生とこの加茂遺跡の調査を相談した。しかもついに京都大学考古学教室において、これを実現するに至らずして先生の逝去に遭い、私もまた教室を去つたのであるが、加茂遺跡の畿内における重要性に対する私の関心は、関西大学に考古学を講ずる様になつて、再び強められるに至つた矢先、ある日学生の名簿をとつたとき、加茂高等学校に勤務の学生がいたのでこれに遺跡の話をしたのが今回の調査の端緒をなした。

やがて関西学院大学との共同調査として着手することゝなつた。遺跡の状態は未だ甚しく漠然としているが、現在の目的は、関学、関大の両大学がこの遺跡を学生の實習地として取り上げ、協内してかなり広い加茂台地上にメスを入れながら学生を指導し、實習をしつゝ調査を進めることに大きな意義がある。

かような調査は、それぞれの大学独自

の立場においても必しも不可能なことではないが、実施の前には企劃があり、実施の後には整理がある。実施においてはいろいろの協力が要である。これらすべて教授指導下に学生諸君が運営し、八月二十九日で第四回（各三日をもつて一単位）目が終つた。

われわれは遺跡調査に対する實習は充分自信をもつて進行させることが出来、その効果を挙げることも可能である。現在私の加茂遺跡に対する見通しは、中期から後期にかけて盛であつて、加茂神社を中心として古代の住居があり、人々は附近の低地に水田を経営し、周辺の山地による狩獵によつて生活をしていたのであると思ふ。これらの文化現象が今後の加茂遺跡の調査において明かにすることが出来るなら、主なる目的とする学生の實習に相對した成果である。

現地では調査に先づ必要な測量實習を関学の渡辺教授が指導され、歴史の方面は関学の武藤、関大の横田兩教授が担当し、考古学と發掘指揮は私が担当している。願はくば教授学生ともに健康でもつて二年に亘る予定を完成したいものである。

昭和二十七年八月三十日

（文学部教授）

（前頁より）

位も捨て、或る時は賭博に耽り、或る時は女を救ひ出す為に監獄に忍び込み、金を借り倒し、詐欺を働き、悪事の数を盡し、終に囚人となつた女と共にアメリカへ渡り、其処にも亦安住せずして、果ては荒涼たる山中に病死した女を、自らの手で埋めると云ふ物語。この物語を讀んで、泣かないものがあらうか。何よりも先づ中庸を重んずる大人、常識と教養とに身を固めた紳士から見れば、この意志の弱い、誘惑に陥り易い、不良青年シユヴァリエ・デ・グリウの一生は、まことに唾棄すべき、著にも棒にも掛からぬものである。だが愛する女の為に、おのが持てる総てを捧げて悔いなかつた愛情の純粋性、一貫性と云ふ点から言へば、

もつと統一を言文化祭演劇

去る十一月六、七兩日に亘つて産經会館で文化祭の多彩な行事が繰展げられたが、その中で浮彫された演劇と音楽をつまみ上げて寸評を添へてすることにしよう。「演劇」は総合藝術である。然りしけれども、新劇を新派、新国劇、歌舞伎などをその儘ソウゴウして、いゝものが出来る筈がない。ピカソばやりの現代思潮に渦巻かれたスタッフ連の新演出法によるのか（？）それはとにかく、午前中の点景が夕暮の靄に包まれてゐるし、垢抜のしたキヤストにとつて田園風な余情は無感。第二日目交響樂團の演奏は、ベートベンの「第八」とシニョトラウスの「皇帝」曲としては共に纏つたものだった。処々

古今東西にその比を絶するものである。タイトルに、「浮瑠璃」に現はれたる」と断りながら、ついそれを逸脱してしまつた。こんな例を求めれば、いくらでもある。かう言つたからとて、半七や、治兵衛や、ドン・ホセや、シユヴァリエ・デ・グリウの生き方こそ、真の生き方であるなど、途方もない事を言つたのではない。西鶴の言ひ分ではないが、「世間は廣し」、「世にないものはなし」、「只も三寸の見直し」と云ふ事を、文学の世界で、一寸やつて見たまでである。どうやら雨は止んだらしい。日が暮れて、虫が鳴き出した。擱筆して、秋灯を消して、私はちつと巷の声を聞いてゐる。（昭二七・九・一六）——文学部教授——

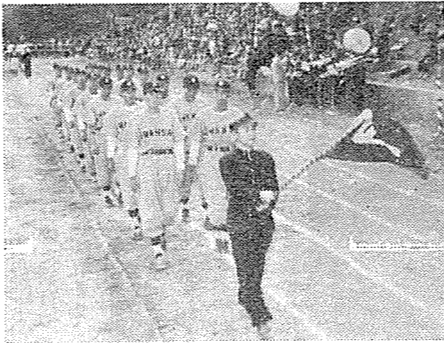
に見えた粗雑さが氣になつた。学生音楽団体として技術的優秀は云うに當を得ないが、これをカバーするべき練習の不足が、素人の眼にもその粗雑さから洩みとられたのは遺憾。殊に「第八」の荒らさには少々辟易した。「第五」とは違つた「第八」のもつ美しさが全く失われていた指揮だけのせいでもある。所謂演奏会の爲の練習よりも練習の爲の練習に汗を流されんことを、演奏の成否はその汗の量の多少による。何れにしろ、学生団体がこうしたテーマと真剣に取組んだ意氣は壯とするに足りるが、観衆に観せ、聴衆に聴かせる爲の努力が更にほしい。拍手は常にその努力にのみ送られるものであることを反省されんことを望む。（O・K）



學生

若き日の佳き想出として残るであらう、学友会の年中行事、大学祭が十一月二日、三日の両日、永き傳統と歴史を誇る関々野球戦の中に狭んで、文化祭が六日、七日と、応援團卅周年記念祭を加えて、多彩な行事を、千里山母校に、西宮球場に、産経会館にと、若き学徒の熱と意気を傾けて繰広げられた。

この日、夜来の寒気に初霜を見る冷氣に、出足を氣使われたが、無風快晴、真に絶好の大学祭日和に恵まれ、時恰も、日曜に続く文化の佳き日碧空冴えて一片の雲もなく、手を差し伸べれば、空の青さに染まるかと思う好天に、父兄姉の出足も上々、さすがに広大な千稜校庭も埋めつくされる盛況であつた。



【大學祭野球部入場】

第一日は、野球部の紅白公開試合で、新体育館では、フェンシング対抗、柔道高校優勝大会、相撲、ボクシング飛入試合等が行われた。

スポーツ行進が終つて、漸く、暮易い秋陽も西に傾く頃、仮装行列の行進が始まる、西遊記で馴染の孫悟空等の面々、三藏法師が馬の手綱を曳き、後には雄弁会員による現代女性風俗、都市農村、各種職業婦人と現代女性の風俗の全貌を仮装して、満場の拍手を浴び、本物の牛を曳く山村の婦人もあると云う凝り方であつた、斯くして最後に応援團員の入場があり、河合團長の宣言、学長の祝詞、執行委員長高橋、文化部長八沢、体育部長大学祭の幕が切つて落され、今シーズン

優勝を賭けた、関々戦を二日後に控えた野球部員の熱のある紅白戦を展開、続いて学内各部学生による、ラグビー学内紅白試合が開始された、一方、新室内体育館では、一部、二部対抗剣道試合があり、技の一部、熱の二部と、参観者を熱狂せしめ、共に大將戦に持ち込み、僅かに技に優る一部擲競技部の主將須鎗の技がきまつて二部は惜敗した。続いて運動場では、学長、学生部長を始め諸先生、諸先輩参列の下に、大学祭、応援團卅周年記念祭祝賀式が舉行せられ、学長の祝詞、高橋執行委員長、河合応援團長の答詞があり、終つて学校役職員父兄の飛入り競技に、満場の参観者を笑わせれば、フィールドでは、東西対抗に関東諸大学を破り、国体優勝、文字通り、日本一の本学ホッケー部の法政定期戦が開始された前半2対2の五分の成績も、後半、本学は地力を發揮して、4対0と一方的に試合を進め、結局6対2で輝く優勝を遂げ満場の拍手を浴び大学祭に華を添えた。

続いて、本年新しく出発した航空部のグライダー滑空は、広大な運動場も狹隘を感じさせる、山村学生課員の指導滑空に始まり、部員一同の夏季合宿訓練の実力の程を公開した、敗戦によつて翼を奪われた我々の前に、グライダーとは云え翼を與えられた希望は、参観父兄姉の胸に、何か沁みる感銘を與えたことであらう、その間、トラックでは体操部員による、体操の妙技が展開され、マツトに、平行棒に、鉄棒に、秋空を截る妙技は観る者をして、肝を冷す空中廻転等、暫し拍手すら忘れるほどであつた、その間、新体育館では、卓球、拳法、レスリング、ボクシング、空手、柔道と、関西に覇を唱える、体育各部の模範試合、対校試合、飛入試合と、こゝにも数多くの觀衆を集めた熱戦が展開された。

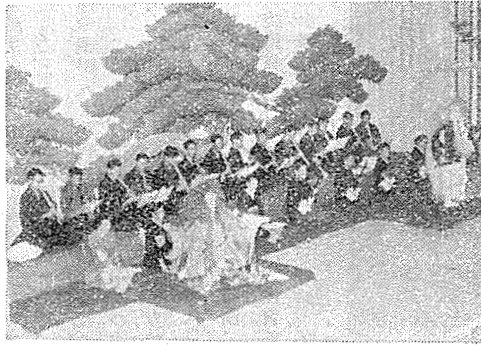
運動場から校舎内に眼を転ずれば、經商学会講堂では、全日本学生弁論大会関西予選が舉行せられ舌端火を吐く若人の弁舌戦があり、展示場には、応援團三十周年の記念展示会に、三十年間の学生々活を偲び、体育各部展示場では、体育三十三部の輝やかしい戦歴の数々を飾る、優勝旗、楯、杯が眼を奪う。又、文化諸部による文化的な展示は、体育各部の輝やく成果にも劣らず、写真部展は、一部二部写真部の合同で、写真美術の粹を父兄に公開、中にも一部松井、片岡の作品、新入一年次生諸君の作品、二部山本部長、植田、澤畑等の作品は、経験の浅い二部写真部としては秀作であつた。美術部の展示場は、例年になく充実振りで、カンナ、三龜山、群像等、特に良く、藤岡の作品Bも印象的であつた、千里山法律学会の夏季休暇を利用した島根県の一漁村に於ける政治に対する漁村民の実態調査、商学研究部の中小企業に關

する展示、ソ研部のソ国文化紹介など見
るべきものがあり、本年始めての新聞社
の学生に関する報道写真展、八島先生を
偲ぶ写真展などは意義深く参観出来たと
思う、第二日は、前日の種目の他に、ア
メリカン、フットボール部のOB、現
役混合の紅白戦、馬術部のOB、現役
対抗戦等が行われ、運動場を駆け廻る馬
術部員の障害飛越の妙技に観衆は、スタ
ンドを埋め、引続き行われたスポーツ行
進に、体育三十三部の偉容を知り、満場
の観衆去りもやらず、運動場に整列を終
つて、体育功労者表彰式を行い、各部対
抗リレー、球技部、体力競技部対抗騎馬
戦が行われた、脚に勝つても、力技には
勝てず、騎馬戦は体力競技部が勝鬨を挙
げた。

橋本の諸君等の祝詞、花束贈呈等あり、
応援團乱舞に移る頃は、すっかり夜の幕
に包まれ、フアイヤーストームが赫々と
燃え盛る中に、応援團三十年間の色々な
型が、その当時の応援團長の服装を模し
て、紹介せられた、学友会員の全員参加
の下にフアイヤーストームを囲んで乱舞
が続く、若き血潮の燃ゆる応援歌が、千
稜校舎に響を返す中に、大学祭の幕が閉
じられたのであつた。最後まで去りやら
ぬ観覧者が、今年ほど多かったことはな
かつた。

◎文化祭 アグネス颱風に憂えられた
雨も晴れて、六日、七日の文化祭も、大学

祭同様の好天に恵まれ、開場時の午前十
時には、会場庶経会館は既に満員である。
八沢文化部長の開会の辞に始まり、「新
しき世代に」と題して雄弁会員の弁論
あり、軽音楽部のハワイアンバンドの演
奏、グリークラブのコーラスが続く、男
声合唱部として、まだ新しい、当部は
部員三十余名の出演、四部合唱に満場を
酔す。終つて、高橋委員長より挨拶あ



【連獅子】

り、山田学生部長の祝詞、午後は謡曲部
による仕舞、番舞子「鶴龜」はシテ林、
ワキ余部の両君、舞踊子は「吉野天人」
の優美な仕舞を竹中淑子、「融」を板東
と、素朴簡潔な日本古来の美しさを見
せ、舞台が替ると、がらりと気分の変
スキング、軽音楽の甘美なメロデーは
満場をうならせる、次は邦楽部の箏曲

「小鳥の唄」は、琴、尺八の合奏、終つ
て長唄「連獅子」は舞踊班の舞踊が、尺
八班の鳴物入りで、獅子近藤、赤松両君
の熱演。尚文化祭に於ける庄巻とも云え
る華麗な日本舞踊の美しさは、眼を奪わ
れる立派な出来であつた

舞台が替れば、演劇部学園座出演の演
劇「菜の花畑」は原戸の演出、二十余人
出演と云う演劇部演技陣総出演で、戦後
のアプレ学生の実態を演じたが、時間の
都合で一部分、カットされたため、劇の
本筋が見失なわれた感もあつたが、暗
い劇であり、演出上のロスもあつて訴え
るものが少なかったのは残念であつた、
遠藤妙子、桑原経昌の演技だけが印象に
残るのみで、この脚本を取りあげたのは
第一の失敗と云える出来であつた。

再び軽音楽部の演奏は、石井部長の指
揮に全員一致、本格的な軽音楽の演奏は
学生音楽の域を超えた感があるほどであ
つた。播磨副委員長の開会の辞に続いて
映画研究部による映写、開映画「めし」
記録映画「関西大学」の上映によつて、
文化祭の第一日を終えた

第二日は前日と同様、各部の出演で
あるが曲目を変えて行われ、第一日出演
しなかつた交響楽団の演奏が加えられ
た、部長大前の指揮で、交響曲第八番
(ベートーベン曲) 皇帝四舞曲(シユト
ラウス曲)の二曲が演奏され、全員六十余
名と云う、他学校には見られない堂々た

る演奏であつた。演劇は第一日と同様ス
タッフによる、同一の演劇、最後に映画
研究部による開映画「女だけの都」を更
に、記録映画「関西大学」を上映して、
二日間にあつた文化祭の幕を閉じたので
あつた。大学祭、文化祭と、来春卒業す
る諸子には、唯一の楽しい思い出となるで
あろう。

◎野球部 対神大戦を終えて九戦八勝
一敗、勝点四であり、優勝確実である
が、関学に敗れんか、勝点同率、優勝決
定戦に持ち込まねばならぬ、是が非でも
勝たねばならぬ試合が、大学祭と文化祭
の中に狭つて四、五日と西宮球場で決行
されることになつていたが、五日は颱風
の余波で雨に流れ、四日は本学が敗れた
ため六日に第二回戦、七日決勝戦と文化
祭当日とかち合つてしまつた。

十一月四日 本学0—4 関学
十一月六日 本学1—0 関学
本学は新人工藤投手の好投良く、老巧
関学本庄投手に投げ勝ち、捕回戦に持ち
込んで十回、大津、小田の長打でアンド
ランを挙げた。

十一月七日 本学1—0 関学
同校第一戦のエース、本学は田畑、関
学は藤江の対戦、両校投手の好投は、再
三のチャンスをつぶし、前日同様一点を
争う白熱戦となつたが、四回、本学は好
機を捕え一点を挙げ、そのまゝ田畑の好
投に押し切つて勝つた。優勝決定、応援
(八頁下段へ)

パリー短信

本学海外派遣留学生として去る七月パリー大学に入学した専任講師高塚洋太郎氏よりその第一信が届いた。

◇パリー到着以来、まず下宿を見付けるのにちよつと苦勞しました。着いた日から大使館の近所のホテルに二三日泊っていました。部屋代が一日五〇〇フラン、食事が附近のレストランで一食三〇〇フラン、初めフランスの食事は聞いていた通り高いと思いましたが、実質的には日本と余り変らない様ですが、しかし實際これでは仲々一介の留学生としては贅沢過ぎるわけで、ホテルのマグムに教えられて学生食堂に足を運ぶ事にしました。

◇学生食堂の食事は大きなアルミの皿に軽く一通りのものが盛りられて一食一三〇フラン、何しろ安いのが取柄でしょう。食事時には、あちこちからざろ／＼学生が集つて来て食券売場に長い行列が出来ます。私もその一人ですがみんな余り金の無きそうな奴ばかりが一諸に食事するのですが、その割りに気分がよく、日本でよく経験したがつ／＼したいやうな感じが致しません女子の学生が案外多く貧しい食事乍ら、和やかに談笑してフォークを動しているのを見ると、見る目にも楽しそ

うです。

到着早々食堂の話で恐縮ですが、これで一先づという所です。

◇さて次ぎは下宿の話という段取りですが、あちこち不案内は土地を尋ね探した挙句、Pension de famille に落付きました。部屋代一日二〇〇フラン、食費は学生食堂のそれと同じというわけですが。現在この下宿人はフランス人が四人、アメリカ人が二人、イタリヤ人が一人に私と合計八人、食卓では勿論皆フランス語、たどたどしい私のフランス語もどうやら日一日を進行しているかなと感じる時もあります。とにかく滞在費用三万フランが最低、四万フランあれば学生としてまあ／＼という所で agréable な生活が出来そうです。

◇この辺といつても私の下宿の他はくわしく知りませんが、建物は皆古いですね。先ず大きな門、それに中庭、その奥に階段があつてそれが五階迄上るという式、部屋もそこにある家具、調度品の類も、みな前世紀かそれ以前のものかと思はれる時代物、それでも部屋もかなり広いし、冬になればスチームも入るといふんですからまあ、贅沢な方でしょう。大使館や先輩の人達からいい家を探したと羨まれています。何しろ古い家らしいのですが、この古さがかえつてパリーらしいと勝手に喜ん

でいます。

◇到着早々疲れもあつてか三四日部屋に閉じこもつてむさぼる様に寝ましたがぼつ／＼日用品の買物に出たついでに町の見物を始めましたが正直な所フランス語の勉強が先に立つて仲々思い通りの足が伸ばせません。

◇毎朝、女中のフランス語が目さめるのですが、その度に自分がパリーにいるのだなあと頭の中でくりかえして、窓越しに屋根の連なりと、変えてこな小さい煙突の列の何だか夢の様な気持ちで眺めています。

尚高塚氏の滞佛中の住所は左記の通りです。

Yotaro Takatsuka

Chez. Mme Bilbaut

21, rue Jacob, 6^e, Paris

France

訂正

前号文中の誤字を次の様に訂正致します。

頁	誤字	正字
4頁三段	明・覚	朋・覚
8行目	放蕩・	放蕩・
同九行目	壯・三	壯・一
同一四行目	仰を	印を
一頁四段		
一八行目		

【編集後記】

◎来日中の大ピアニストA・コルトー氏より寄せられたメッセジを巻頭に掲げ得たのは光榮の至り、同氏の名演奏は既に各地の演奏会を始めレコードに、放送に周知の通りですが、優れた解釈と円熟したテクニックは、氏の偉大な人格と相俟つて天下の音楽愛好達の賞讃を惜まぬ所のものであります。

◎八鳥先生が亡くなられた後、早速乍ら表紙写真撮影という困難な問題に直面しました。そこで学報関係者が腕を振つた数十枚の中の一枚が本号の写真です。諸賢の御批判を乞うと共にこの方面でも積極的な御協力をお願いする次第です。

◎向寒の禰り各位御自愛專一の程を。(〇)

昭和二十七年十一月十日印刷
昭和二十七年十一月十五日發行

關西大學學報 第二五三號

一年誌代費三〇〇圓(送料共)

大坂市大淀區長柄中通二丁目二番地

編集者 松 生 和 夫

發行人 西 井 茂 藏

印刷者 西 井 茂 藏

大阪府北區川崎町三七

印刷所 株式ナニワ印刷所

電話堀川(三)九三番

大坂市大淀區長柄中通二丁目

發行所 關西大學學報局

電話堀川(三)七五五番
電話大坂二六七七番

関西大学 専門部 有終記念論文集

内 容 目 次

法 學

ホップスの君主権論とその批判
傍系相統について

經濟學・商學

交通の因由と宗教
十六世紀イギリス毛織物工業の構造の二類型
ケインズ理論と金融理論
国際貿易による利益と完全雇用
明治初年の堂島米市場

文 學

郡書治要の周易
「は せ を」
ペビスの日記について

工 學

船の起因と船に関する文字
田周率の計算に関するオイラーの公式拡張
材料の剪断強さに就て

クロース装幀背文学 二六〇頁

頒 価 金參百五拾円

予約御申込及び御注文には「振替口座」大阪一二八七五番関西大学」を御利用下さい。

関西大学国文学会編集

季刊 國 文 學

第八號

昭和二十七年十月

定 價 七 十 円
送 料 六 円

「はしけやし」から「はしきよし」へ……………吉永 登
上代文獻に於ける「野」字の訓……………浜田 敦 義
藤原資国は大鏡作者に非ず……………平田 俊 春
安藤年山の学的系譜……………久保田 收
孤屋「野さらし乃紀行」の価値……………彌吉 菅 一
写本「野さらし乃紀行」……………鈴木 重 雅
關更の俳風……………鈴木 重 雅
斎藤茂吉研究文獻目錄(一)
彙 報

萬 葉

昭和二十七年十月

第五號

相關の意義……………伊 藤 博
萬葉集の芸術史的位置……………中村 茂 夫
青 雲 放……………吉 井 巖
萬葉集講話……………沢 瀧 久 孝
黃 葉 片 々……………沢 瀧 久 孝

頒 価 八 〇 円

萬 葉 學 會

吹田市千里山関西大学内

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十七年十一月十五日発行(毎月一回十五日発行)

關西大學學報 第二五三號・十一月號

定價三十円